Y10a　学校教育における疑似科学の実態調査

○武藤浩二，長島雅裕，上薗恒太郎，古谷吉男，安部俊二，小西祐馬（長崎大学教育学部）

我々は昨年度長崎大学で実施した疑似科学教育の調査において，約 1 割の学生が何らかの疑似科学教育の体験を有しており，高校理科で実施されている例が複数存在することを明らかにした（2011 年春季年会 Y30b）.

今回，我々は WEB 等で同様の調査を広く呼びかけ，これに応じていただいた複数の大学，高校での調査結果を集計した．調査は（1）「水からの伝言」に代表される疑似科学あるいは科学的に正しいかどうか不明確な授業等の経験の有無（有の場合は覚えている範囲でその内容，先生等の態度，学校名と所在地等）及び出身地,（2）10 項目の言説のうち正しいと思うもの,（3）24 項目の性格特性と対応する血液型の 3 項目についてアンケート用紙に記入してもらう方法をとった.

その結果，大学生（新入生が中心であるが，2〜4 年生も混在）については 1221 名の回答者のうち 1 割強に当たる 142 名が否定的ではない疑似科学の授業等を受けていることがわかった．これらの中には，大学で「水からの伝言」を肯定的に取り扱った講義を受けたという例や，中学校で「水からの伝言」を肯定的に扱った道徳授業を受けた後，高校理科で否定的に取り扱った授業を受けたという学生もいた．このような授業等の経験者は,「水からの伝言」の内容を正しいと回答する割合が非経験者に比べて有意（1[%] 水準）に高く，先の報告と同様の傾向となった．一方,「水からの伝言」や「マイナスイオン」,「血液型と性格」を否定的に取り扱った授業等の経験者はわずかに 8 名であった.

これらの調査は学生の記憶に頼っており，潜在的にはもっと多くの経験者がいると考えてよい．調査の精度を向上させる方法について検討するとともに，学校現場での対策を考えなければならない.